



藤だより

第4号

発行 2025年5月18日
編集 藤陵会熊本県支部

支部長挨拶

支部長 中津海順子

皆様 ご清祥にてお過ごしのことと存じます。

この度、支部だより第4号を、九州交流会特集として発行する運びとなりました。発行にあたり、同窓生各位より、素晴らしい原稿を頂戴致しました。是非ご拝読下さい。

つきましては、昨年2024年10月『九州交流会in天草』と銘打って1泊2日の旅を、熊本支部主催で開催致しました。

九州交流会は、2011年当時の支部長様方のご尽力により発足致しました。

しかし、2019年藤陵会百周年記念行事前夜 西本願寺開法会館にて開催されて以来、コロナ感染確認により中断しておりました。そこで、交流会が、途絶えるのは残念だと思い、熊本支部での5年ぶりの再開を試みる事と致しました。

そして、何度も、何度も、役員会で打ち合わせを重ねての、心配しながらの開催でした。ところが、当日は、お天気にも恵まれ、皆さん、イルカウォッチングに大はしゃぎ、そして、ホテルの宴会では、伊勢海老の刺身や天麩羅、アワビの踊り焼きなど海の幸に舌鼓をうち、余興では、熊本支部の立派な化粧まわしを付けての女相撲土俵入り、天草ハイヤ総踊りと、アルコールも入り大盛り上がりでした。その後、天然温泉にて疲れを癒し、翌日は、牛深の世界遺産見物、海産物の買い物、

昼食に立ち寄りながらの道中でしたが、さすが同窓会、帰りの車中は、寮の話題等で打ち解けて、京女時代に戻ったかの如く、ゲームに興じて、笑いに包まれているうちに無事、熊本駅に到着いたしました。参加者の方々は、楽しかったと大変喜んでくださり、笑顔笑顔で帰路に着きました。

ご参加くださった皆様と熊本支部の役員の方々のご協力のおかげで、和気あいあいと京女時代を彷彿させる思い出深い旅を、予定どおり決行することができました。感謝の気持ちでいっぱいでございます。これからも、九州交流会が各県で開催され 藤陵会の親睦の輪が広がりますことを念じております。そして、藤陵会熊本支部の一人でも多くの方と、京都の思い出話に花を咲かせたいと願っております。今後とも宜しくご協力お願い致します。



♪♪サ～サ～ ヨイヨイ♪♪
天草・牛深ハイヤ節。総出で踊りまわりました。



天草・観乗寺さんに保管してあった相撲衣装をお借りして、熊本支部役員土俵入り。



天草下田 望洋閣で、ハイ、パチリー。この笑顔 大満足。

2024 (令和6) 年度 九州地区交流会 in熊本 (天草)



伊勢海老。甘くて新しくプリプリをしっかりと味わいました



すごい。足腰丈夫！



お参り (お仏参り)。昔、寮のお朝事を再現。導師 源桂子師。
「ブッダランガッチャーミ ダンマンサラナンガッチャーミ サンガン
ランガッチャーミ 合掌」

○旅行日程

10月15日 (火) 16日 (水) 1泊2日

○参加者 九州地区京都女子学園卒藤陵会員

○行程

15日 12時 熊本駅前出発

15時半 リゾラテラス天草にて休憩

17時 下田温泉 望洋閣着

18時より懇親会

開会／お仏参／各県代表自己紹介／福岡
支部長の舞／県支部参加者の女相撲土俵
入り／校歌「あなとうと」／「牛深ハイヤ節」
参加者総踊り／次回開催支部福岡にバ
トン渡し／閉会

16日 8時半ホテル発

崎津天主堂 (世界遺産)

天草海鮮蔵 (昼食)／藍の天草村

15時 熊本駅新幹線口着解散

お天気に恵まれ、10月半ばなのに半袖、日傘。
一人の病人も事故者もなく、無事に各県に帰
宅しました。

戦後80年特別寄稿

終戦前後の私達

塚 寄 宏 子

今年私は八十五才となり、戦中前後の体験者も少なくなってきました。そこで敗戦国となった日本の現状を、幼稚園生だった私の目を通して書いてみることにしました。

元氣な男性を兵隊さんとして取られてしまったのを、残された人達はどう埋めて行ったのでしょうか。まず、郷里の宇土市では、「日本合成化学工場」では女学校を出た位の娘さん達を集め「挺身隊」と名づけ、工場で働いて貰っていました。つくるものは多分軍からの指示の物と思われます。田舎にたった一つしかない工場なのに、アメリカはちゃんと調べていて、複数回空襲をしており、その度に娘さん達が数名亡くなられたと聞きました。「挺身隊」は宇土半島や島原あたりの女性達だったようです。

B29が絶えず姿を見せるようになった夏の

朝、宇土が危ないとの知らせで町中の人は防空壕ではなく、各々田舎や親戚を頼る人も多く、我が家も、おばあちゃんは仏様を抱き、叔母は「過去帳」を、母は三歳の弟を引いて、宇土の奥の栗崎を目指して家を出ましたが、途中中田んぼの中の水路でB29に目をつけられ、下降して来てはダッダッダッツと焼夷弾で威嚇し、スーッと上に上がり数を回繰り返して飛び去りましたが、恐ろしくて私達はそこから動くことが出来ませんでした。

宇土町はパチパチと音を立てながら町中すっかり燃え尽くされていました。日が暮れて町も静かになったので、もと来た道を引き返しましたら我が家の周辺は、幸いにも残っていました。

間もなく焼け出された人達が「暫く泊まらせて下さい。」と次々に来られて半年後位、17家族70名余りの方達が四十畳位の本堂に泊まられました。それで降行く先が見つかった方から順に出て行かれました。

その頃の日本は生活必需品はほとんど配給制となり、通帳がなければ何も手に入らない状態だったと思います。中でも食料は配給だけではとても足りなくて、母親達はリックサツ

クを背負って、さつま芋等を買出しにでかける人が多かったようです。農家とのやり取りでどうしても手に入れたい物がある時は、若い時の晴れ着等と物々交換することもあったと聞きました。

翌年の春、私は一年生となりました。しかし、小学校はまる焼けでしたから、私達は一クラスずつ焼け残った寺々での新学期となりました。クラスの子のお父さんやお兄さんが復員して帰られると皆で手を叩いて喜びあいました。四年生になった頃、アメリカから言う変な匂いのするミルクが給食として出されるようになりました。

このようにして少しずつ日常を回復して行った様に思います。

このような大混乱の中、昭和20年8月15日戦争が終わりました。終戦後も日本熊本宇土は大混乱が続きました。それでも父と母は私の健康を気遣いながら育ててくれて、京都女子大まで進学させてくれました。有り難い父母への想いを心を込めて毎日手を合わせております。

お導きに感謝を捧げつつ

菊 本 澄 代

藤だよりの原稿を依頼され、日頃より敬愛して止まない京女藤陵会の先輩方のお目に触れるそのようなものに、若輩の私ごときが何を書いたらよいのやら困惑している内に、時間はさらさらと流れ締め切りは過ぎ、ようやく恥を忍んでペンを執った次第でございます。今年は還暦を迎える年齢となり、短いながらも今までを一度振り返り、そして先の人生を見つめるのに適した年頃かも知れません。不精者にて、写真やスケジュール帳、日記の類いも残しておりませんので、移動の途中、車窓から移り変わる景色を眺めながら、少女時代から今に至ることに思いを馳せました。

本当に脳天気な高校生でございましたので、進学する学校へ希望することは、女子校であること、思う存分小説が読めることの二つの条件しか無く、そこへ両親の、自立心が養われるよう熊本県外の学校であることという勧めが加わり、京都女子大学国文科へ入学させて頂くこととなりました。

級友は日本各地から集まっております様々な方言が

飛び交う教室は楽しい場所でした。粗忽な私は受験の際に先に挙げた二つの条件しか調べておりませんでしたので、入学してから初めて浄土真宗の学校であることを知りました。我が家は浄土宗でございましたが幼い頃より父の友人の真宗の御寺さんによく遊びに伺っておりましたので、宗教の時間は非常に興味深く大好きな時間でございました。下宿先は吾道庵(あどあん)というお茶室が一階にある学生マンションで、大変親切なご夫妻が大家さんでした。その当時は全てを日常の当然と受け止め、何の感慨もなく、ひたすら本を読み深夜テレビの映画にうつつをぬかしておりましたが、今思いますと、授業だけでなく登下校の道すがらの風景やご近所のお寺さん、美術館や博物館などの全てが、古から今に至る日本の美しさとその多様性を湛えてそこに在ったのだと、有難いお導きに感謝せずにはいられません。

クラブ活動は能楽部観世会に入りました。能楽師でございました父の勧めでもなく、なんとなくすうつと入会いたしましたものの、ご指導は杉浦元三郎先生とおっしゃる観世流の重鎮にて、それを聞いた父が驚きまして、杉浦先生に長い手紙にてご挨拶をいたし、私はそのいきさつを杉浦先生よりもれ聞いた次第でございました。三回生の春そ

の父が急逝いたし、私は急遽、観世流大西家の内弟子として玄人となるべく入門したのでございますが、あまりにも慌ただしい成り行きにて、四十年近く経てもその当時の記憶が朧な程、私に取りましては衝撃的な人生の転機でございました。

私は観世流能楽師の端くれとして生きておりますが、ご連絡も果たせないまま不義理をいたし今は彼岸の彼方の御方様への思いを胸に、現在お育み頂いているご縁の全てに心より感謝申し上げて、精進を重ねて参りたいと思っております。



私にとっての京都生活

高柳 和

京都女子学園同窓会に初めて参加したのは何年だったかしら。確か鶴屋デパートの会場でした。佐賀から熊本に嫁いできて寂しさをのらせていた頃でした。次にはつきり覚えていのは1992(平成4)年、センターホテルでの支部総会。それから2年毎の総会に参加致しました。記録写真を辿ってみると、こんな方がいらしたと懐かしい思い出が一杯になります。

学生生活で、思い出されるのは学業よりも錦華寮での寮生活。朝、寮長先生の「おはようございませう」と声高らかな第一声に四人部屋の私達はまるで「こまねずみ」のように跳ね起き布団を丸めて寮長先生の目に触れない様に片隅に押しやり、ドアの外に一列に並んで直角に腰を折り、「おはようございませう」と礼をした事。四人でてくてくと古寺巡礼しながら京都中のお寺巡りをした事。とにかくお腹が空いて、その頃売り出されたチキンラーメンを四つに割ってお

湯をかけてみんなで食べた事。部屋の先輩に誘われて入部した演劇部で、いきなりリイプセンの「人形の家」の主役ノラ「京都会館公演」に抜擢され、無我夢中でとにかく頑張った事。舞台が終わった後、とうとう倒れてしまい、兄の同級生に背負われて病院に担ぎ込まれた事等々、その一つ一つが私の大事な京都生活、青春時代の宝物です。

昨年4月、結婚生活五十五年を迎えた夫を亡くし、様々な雑務や整理もほぼ終わりに近づいて、一人の生活もある程度落ち着いてまいりました。

丁度、家業の店がある下通の「下通女性部」の部長を今年6月から再び引き受けて、私が音頭をとって始めた「城下町くまもと肥後のひなまつり」にもう一度関わるようになりました。

又、昭和23年の父の代からの「熊本ローテニスクラブ」も亡き夫から引き継ぎ、私が取り敢えず代表として、経営していく事になり、先ず手始めに老朽化したクラブハウスのリニューアルを計画中です。私の人生の最後のご奉公だと思っ、なんと頑張るつもりです。

熊本は第二のふるさと

小坪やよい

古刹、文学、しまなみ海道などで知られている広島県尾道市出身です。夫の仕事「造船」の都合で、熊本県荒尾市に居を構えてはや半世紀となります。

二〇一八年に藤陵会熊本県支部があることを知り、入会させていただきました。支部の同窓会でお会いした方々と京女や京都と言う共通の話題で楽しく語らう事が出来ました。私は日吉寮に二年間お世話になりました。朝一番の礼拝、寮監先生のご講話、同室の方達との生活、今はないかも知れない冬の「豆炭あんか」、いつも外出届は「四条河原町」などの思い出はつきません。2011年、かつての同級生三人づれで西本願寺に参拝しました。阿弥陀堂、飛雲閣などの歴史的建造物にあらためて感動し、楽しいひとときでした。その後も度々京都を訪れて学生時代を思い出しながらあちこち散策しましたが、コロナ禍以降は途絶えています。

「継続は力なり」と言う言葉を頼りにして、

三十代から始めた書道を今も続けています。書道会の先生や先輩方からご指導をいただいています。書の奥深さを痛感しています。書道会の方や近所の書道好きの方など、書道を通じて多くの方々と知り合うことが出来て楽しく交流しています。

また、ガーデニングも楽しんでいます。これは夫と共通の趣味です。「花の庭 三逕」「三逕」は陶淵明の「帰去来の辞」からと名付けた庭には、ベコニア200種、バラ160種をはじめとして多くの花を育てています。一年を通して花が絶えることはありませんが、とりわけ三月から七月は庭の花の一番の見頃となります。こうした花をきっかけとした交流の輪も広がりました。

勉学、書道、花などを通じた出会いのご縁を大切に、「日々是好日」を信条としながら過ごしていきたいと思っています。

最後に、皆様の益々のご健勝をお祈りいたします。難いお導きに感謝せずにはられません。

京女に感謝！ 我が家に咲いた一輪花

隈部知更(既卒生保護者)

「京女の四年間メッチャ楽しかった。お父さんありがとう」。京都から熊本へ。凛々しい袴姿の画像とともに送られてきたメッセージに思わず頬が緩み、「おめでとう」と呟きました。2018年3月のことです。しばらくして、卒業式に同席した妻からも電話。「今日初めて学内に足を踏み入れたこと」、「とにかく卒業式が素晴らしく、特に大谷範子様(本願寺前お裏方)の式辞に感動したこと」、「キャンパスの佇まいに伝統を感じることを」と、興奮気味に話してくれました。やはり親鸞聖人の教えに基づく建学の精神はもとより、九条武子様を始めとした先人の方々の願いが至るところに染みついて、学内のすべての人々に届いているからだろうと改めて確信しました。

娘と京女の縁は、高2の夏のオープンキャンパスまで遡ります。娘は、幼少期から読書とピアノが好きでした。読書好きは母親による絵本の読み聞かせが出发点。ピアノはおもちゃの鍵盤をたた

くことから始まり、高校まで熱心にレッスンを重ね、音大進学も視野に入れていました。そのため、京女のオープンキャンパスでは、発達教育学部(音楽)を中心に情報を収集し、受験のための準備を進めました。

ところが、高三の秋になって大どんでん返し。『ピアノの道も諦めたくないけど、世の中をもっと広い視点で捉えてみたい』との考えから現代社会学部を受験することに。残り少ない時点での方向転





換で本人も不安でしたでしょうが、オープンキャンパス以来「第一志望は京女!」という京女愛は揺らぐことなく受験に臨みました。そして涙の合格発表。ノートパソコンを操作する娘の表情を食い入るように見つめていた瞬間を、今でも鮮明に思い出すことができます。

その年の四月から晴れて大学生となり、キャンパスへと続く女坂を毎日歩いて通学する日々が始まりました。初めての一人暮らしにもすぐに慣れ、たくさんの友人に恵まれた学生生活を送りました。入学当初から現代社会学部のカリキュラムに加え、独自の英語学習にも挑戦。三回生からは臨床心理学のゼミに所属し、ストレスマネジメントに関する卒業論文に取り組みました。英語とストレス研究、この二つのテーマに専念した経験が、後の社会人生活に役立つことになったのです。

娘は我が家の長女(第一子)です。

娘の誕生により、私たち夫婦も初めて親になりました。しかし、いきなり試験が。予定日を過ぎた難産で、産声もあげぬまま保育器へ。産科の先生からは「新生児仮死」と告げられました。目の前は真っ暗に、頭は真っ白になりました。まさか誕生と同時に「いのちの危機」に直面するとは夢にも思っていなかったからです。幸い最初の大波を乗り越えることができましたが、子育て初心者的我们たちは、ただ健康に、ただ元気に、それ以外は何も望まないという心境で過ごしていました。その後も紆余曲折を繰り返しながら、娘は少しずつ大きく、私たちも親として育てられていったような気がしています。

娘の名前は漢字で三文字。その真ん中は「花」という漢字です。古い仏典に登場する花の名に由来しているのですが、私たちの思いは、森山直太郎さんの『花』という歌の歌詞とも重なっています。「♪花のように花のように ただそこに咲くだけで

美しくあれ...」。それは、「大きくなくても豪華でなくてもいい、大地にしっかりと根付く一輪の花のような人になってほしい」という願いです。娘と喜怒哀楽をともしする中で、多くの人に支えられ、そして京女に育まれ、我が家に一輪の花が咲いたと思っています。

京女卒業後はそのまま京都で就職しましたが、社会人生活七年目となる昨春、転職して東京へ。現在は外資系企業で日夜英語漬けの仕事をしているとのこと。やりがいのある仕事である一方で、職場や取引先担当者との人間関係に悩むことも少なくないとか。やはり最大のストレスサーも人ならば、それを克服する際の支えになってくれるのも人なのでしよう。京女時代に英語学習とストレス研究に取り組んだ経験が、日々の課題に向き合う際に大きく役立っていることを再認識しているようです。今年の正月、久しぶりに帰省した娘は、とてもいい顔をしていました。

編集室より

藤だより第4号-藤陵会九州地区交流会 in 天草の特集号-をお手元にお届け致しました。

交流会は、好天に恵まれ九州各県はもとより、島根、広島県からもたくさんのご参加をいただき、有意義な交流会になりました。みなさん、満足してお帰りいただき安心しました。

藤だよりは、回を重ねる毎に、充実した内容になり、お忙しい中に投稿戴いた方々に、こころより御礼申し上げます。今号は、諸般の事情により、顔写真を掲載

することが出来ませんでした。ご了承下さいませ。

前回から、会費逼迫により皆様方にご寄付のお願いを致しましたところ、88,000円のご寄付を頂きました。誠に有難うございました。有り難く印刷や送料に使わせていただきます。

毎回のお願いですが、2年で3,000円の会費を納め、京女の絆を広げましょう。

(林田 藤岡)